論文の内容の要旨

論文題目

第 2 言語音声習得における知覚と生成の関係
―成人韓国語話者の日本語習得に見られる外国人訛りを中心に―

氏名

金　菊熙

要旨

青少年期を過ぎてから第 2 言語（L2）学習を始める場合、僅かな例外を除き、一般には、目標言語の母語話者（NS）のような発音の習得は困難であるとされている。成人学習者の L2 発話に観察される、NS とは異なる音声上の諸特徴は「外国人訛り（FA)」と呼ばれ、NS の発音規準から「逸脱した」音声として扱われる。

FA が起こる原因については、未だ解明には至らず、研究者によって様々な解釈が行われている。脳機能の変化、成熟に伴う認知機能の衰退、先行経験（母語）による影響、NS 音声のインプットの問題、スピーチメカニズムの低下または損失、動機の欠如、態度、適性の問題等など、多岐に渡る。

L2 学習者にとって FA が重要かつ問題になる理由の 1 つは、NS に限りなく近い言語能力を持つとされながらも、L2 音声に反復的に表れる FA は、非母語話者（NNS）の発話を「不完全」なものであるという印象を与えてしまうからである。NS の聞き手が、NNS の発話に対し、ときに偏見を抱いたり、ステレオタイプ的な態度を示したり、さらには差別的行動を取るなどの事例は多数報告されている。一方、L2 学習者は、L2 経験の増加に伴い、言語使用（performance）が上達するのに対し、常に言語能力（competence）との間で「ギャップ」を感じる。これは、L2 使用国での社会適応やアイデンティティの問題にも何らかの影響を与え得るのではないだろうか。

L2 音声習得をめぐる最近の研究動向に鑑み、母語は強力な生得的メカニズムによって獲得され、L1 音声の確立の度合いが、後続の L2 音声習得のレベルに影響を与えるという見

解が主流である。そして、成人学習者の場合、既に完成された L1 音声カテゴリーを用いて L2 を発音するために、学習初期には常に L1 からの転移が起こる。さらに、L1 とは音響的に異なる L2 音声に対しても、L1 音声カテゴリーの中から実現しようとする。外国語の音声に初めて接するときや、その発音を模倣する際、聴覚的には L1 に存在しない「異質の音」を体験しつつも、L1 の調音方式に頼ってしまうことはよく経験することである。しかし、L2 学習の進行に伴い、学習者の音声空間は再構築され、L1 と L2 の音声の違いに対する認識は促進され、L2 音声を L1 カテゴリーに同化させる程度も次第に減少していく。やがて、L2 音声体系に対する認識が改善されることで、L1 から分離された L2 音声カテゴリーが出現するとされる。

上記の考え方は、主に Flege（1989, 1991a, 1995）によって提唱された「音声学習モデル」として知られている。Flege は、L1 に類似する（しかし音韻的には区分される）L2 音声は、L1 に存在しない L2 音声の習得よりも困難になると予想した。また、学習開始年齢が増すにつれて目標言語の母語話者のような音声カテゴリーを作る能力が劣るとしても、L2 使用環境での学習経験を積むことによって、この能力は改善できると主張する。さらに、L2 経験の効果は、経験の豊富な学習者と、非経験者の、L1 と L2 音声の違いに対する知覚能力を比較することで測定できると述べている。

以上の理論的背景をもとに、本稿は、成人学習者の L2 音声能力を検証する目的で、L2 経験が L2 音声の知覚と生成にどのような変化をもたらすのかを中心に考察を行った。そもそも一定の年齢を過ぎてから L2 音声学習が行われる場合、母語とは異なる L2 音声の知覚と生成能力の獲得は、目標言語の母語話者同様に可能になるのか。それとも、一方の能力は可能になるが、他方は遅れる、など、習得プロセスや順序において差異が見られるのであろうか。

従来の研究では、分節音と超分節音のいずれを対象とするかによって、L2 音声の知覚と生成の関係について、相反する結論が出されることがあった。そのため、本稿は、日本語（L2）の音節単位であるひらがな音と、文章の、2 つの発話における知覚と生成、および知覚と生成の関係の検証を試みた。

実験は、実験Ⅰ（ひらがな音）と実験Ⅱ（L2 文章）に分けて実施した。以下で、実験Ⅰおよび実験Ⅱを概観する。

実験Ⅰの「ひらがな音の知覚と生成」では、ひらがな音の聞き分け能力と生成能力をテストした。聞き分け能力の検証は、「ひらがな音の聞き分けテスト」を行い、目標言語の使用国で長期の滞在経験を持つ被験者グループ（JSL）と L1 使用環境でのみ L2 学習を行った被験者グループ（JFL）の間で L2 音声の聞き分け能力に違いがあるかどうかを調べた。一方、生成能力については、「ひらがな音の発話テスト」を行った。上記の JFL と JSL の被験者の他に、比較集団として母語話者と非母語話者グループを加えた。「聞き分けテスト」で用いられたひらがな音の一部を実験材料とし、被験者が「1 人で発音したとき」と、「母語話者を真似て発音したとき」の 2 種類の発話データを設けた。発話データに対する判断

は、平均年齢が 20 代前半の 40 人の日本語母語話者が行った。聞き手は、被験者グループと比較集団の発話データをランダムに聞いた後、話し手が「日本語母語話者（NS）である」か、「非母語話者（NNS）である」か、を判定する。同時に、発音されたひらがな音の書き取りも行う。

以上の実験 I の結果、以下の知見を得た。

①成人 L2 学習者にとって、L1 に存在しない新しい L2 音声の習得も極めて困難である。

②長期の滞在経験によって、ある程度聞き分け（知覚）能力は変化していく。

③しかしながら、新しい音の生成は、化石化や個人差などの L2 経験以外の要因が関わる可能性が高く、聞き分け可能な音が、必ず生成も可能であるとは言えない。

実験 II の「L2 文章の知覚と生成」では、会話体の文章を「1 人で発音したとき」と「母語話者を真似て発音したとき」の 2 種類の発話データを設け、日本語母語話者の聞き手による訛りの程度判断結果をもとに分析を行った。成人学習者の「L2 使用環境での滞在経験の有無と L1 使用量の多寡」によって、L2 文章発話の知覚と生成に差異を生むかどうか、が実験の主たる目的であった。このため、被験者は、「L2 経験」が明確に異なる 2 集団を選定した。そして、被験者とは別に、母語話者と非母語話者からなる比較集団を設け、話し手の発話音声の特質が 1 つの言語特性に偏らないようにするなど、音声データの提示順番についても細心の注意を払っている。また、「L2 経験」要因のほかに、L1 方言のアクセント型の違いによって、「母方言の転移の効果」が表れるのかを確かめた。さらに、被験者の「性別」と外国人訛り（FA）の程度の関係についても検証を行った。

［1］被験者グループ（JFL、JSL）と比較集団（NS）の 3 集団間で、訛りの程度に統計上の有意差が見られるかどうかを調べた。統計の分析は、①被験者グループが「1 人で発音したとき（A）」のすべての発話文を総合した場合、②「1 人で発音したとき（A）」の発話文ごと、③被験者グループが「母語話者を真似て発音したとき（R）」のすべての発話文を総合した場合、④「母語話者を真似て発音したとき（R）」の発話文ごとに分けて、JFL-JSL-NS 間の訛りの程度を比較した。検定の結果、上記の 4 つの場合すべてにおいて、3 集団間で統計上の有意差が得られた。したがって、成人学習者が「1 人で発音したとき」と、「母語話者を真似て発音したとき」の、L2 文章の発話は、母語話者の発話とは異なるものとして区分されることが分かった。換言すれば、これは、成人学習者の L2 経験は、NS のような発音能力を得るに至っていないことを意味する。

［2］成人学習者グループ JFL と JSL 間で、L2 文章の知覚と生成の結果に、L2 経験の効果が表れるのかどうかを調べた。①JFL と JSL のそれぞれにおいて、「1 人で発音したとき（A）」と「母語話者を真似て発音したとき（R）」の FA の程度を比較した結果、JFL、JSL ともに、「1 人で発音したとき（A）」と「母語話者を真似て発音したとき（R）」の FA の程度に、統計上の有意差が確認された。つまり、L2 経験の多寡を問わず、成人学習者の発話模倣タスクの結果、FA の程度は有意に低下する。②被験者が「1 人で発音したとき（A）」

と「母語話者を真似て発音したとき（R)」の 4 つの発話文を総合して FA の程度を比較した。その結果、A と R の双方で JFL-JSL 間に統計上の有意差が認められた。これにより、L2 経験の増加に伴い、L2 文章の知覚、生成能力ともに向上していくと考えられる。③発話文ごとに JFL、JSL が「1 人で発音したとき (A)」と「母語話者を真似て発音したとき (R)」の FA の程度を比較した。その結果、発話模倣の効果は、JSL においてより顕著に観察され、L2 経験の効果は、L2 文章の知覚、生成の双方に影響を与えると考えられる。

［3］「L2 経験」要因のほか、学習者の母方言と性別は、成人学習者の L2 文章の知覚と生成結果に差異を生むかどうかを検証した。その結果、日本語の東京方言と類似する高低アクセント型を持つ韓国語の慶尚道話者と、無アクセント型のソウル話者の間で FA の程度の差異は見られなかった。そして、女性話者と男性話者の FA の程度においても、両者間で統計上の有意差はないことが明らかになった。

以下に、実験Ⅱの結果を総括する。

①成人学習者の L2 文章発話は、母語話者の音声とは区分され、異なるものである。

②L2 経験の効果は、L2 文章の知覚と生成の双方に影響を与える。

③学習者の母方言、および性別は、FA の程度に統計上の有意差をもたらす要因ではない。